

# 留学生への作文教育

—関心や能力をどう引き出すか—

永 澤 濟

## 要 旨

留学生Aへの作文教育の実践例を示し、指導者が留学生個人の関心や能力をどのように引き出し、日本語の文章作品として結実させ得るか、について考察した。

当初、Aの作品は、純粹な随想として執筆が開始されたが指導者の助言や添削を経て、最終的に、前半に随想3点、後半にアカデミック・レポートを置く、アカデミック・エッセイのスタイルに発展した。この実践例が示すのは、学生は〈書きたい内容〉にたどり着けば、自らの能力を活性化させ、主体的に執筆を進めるということである。よって指導者は、学生の〈書きたい内容〉を引き出し発展させられるよう、原稿や対話を通して学生の関心を汲み取る姿勢をもつことが重要だと思われる。

母語と母語以外での作文教育を比較すると、「自分にしか書けないことを誰にも伝わるように書く」といった「文章の基本」は共通しているが、大きく異なるのは、母語以外の作文では〈書きたい内容〉と〈書ける内容〉が乖離することが多いという点である。

このようなケースにおいて、学生の〈書きたい内容〉の方を、評価し尊重することが重要であり、以後の執筆意欲につながると思われる。同時に、学生が自力で〈書ける内容〉のレベルを高めるため、文章読解による表現の獲得、文法の基礎力養成など、インプットにあたる教育が必要である。

## キーワード

作文教育、文章表現、日本語教育、留学生、指導の事例報告、随想、アカデミック・レポート

## 目 次

1. 本稿の目的
2. Aの作品概要と執筆経緯
3. 執筆と指導の実践
  3. 1 事前講義
  3. 2 導入的課題の執筆
  3. 3 推敲と添削
  3. 4 もう一つの小品
  3. 5 後半「アカデミック・レポート」の執筆と調査
4. 日本人学生への作文教育との比較
5. 結論

### 1. 本稿の目的

本稿では、留学生A（以下、単に「A」とする）への作文教育の実践例を示し、指導者が留学生個人の関心や能力をどのように引き出し、日本語の文章作品として結実させ得るか、について考察する。

### 2. Aの作品概要と執筆経緯

Aは、文部科学省募集国費外国人留学生（日本語・日本文化研修留学生）として、2016年9月から2017年9月までの1年間、名古屋大学に留学し<sup>1</sup>、留学期間の後半にアカデミック・エッセイを執筆した。この執筆課題は、毎年、名古屋大学の日本語・日本文化研修留学生全員に課されてきたものの一つである。具体的には、1月末に筆者による週1～3時間程度の個人指導を開始し、クラス（当年は計7名）での中間・最終発表における複数の教員の指導を経て、7月に400字詰め原稿用紙約35枚（多数の図を含む、A4用紙24頁）の作品「蘇った記憶～石けりの旅」を完成させた。

本エッセイは、冒頭に「石けり」遊びをめぐる随想形式の小品「プロローグ」「旅の始まり」「出会い」を置き、続く後半では、アカデミック・レポート形式で、インドネシアと日本の石けりに用いられる各種の図形や遊び方

の異同を考察し、さらに世界各地の石けりとも比較し、各地に類似の形式が広がっていることを示す、という内容である。本作品の特筆すべき点は、Aが、多島国である母国インドネシア各地の石けりを自ら調査し、地域ごとのバリエーションを示した点、そして、カンボジア、シンガポール、クロアチア等でも同一または類似の図形が用いられていることを明らかにした点にある。その成果は、民族学的にも興味深いものであった。

このようなテーマにAが関心をもったのは、数年前に日本のテレビドラマで石けり遊びを目にしたことがきっかけであった。幼い頃、両親の帰りをひとり待ちながら寂しさを埋めるように遊んでいた石けりが、異国の日本にもあることを知り、感動したという。

筆者は、作文指導を開始した当初、Aに与えた導入的課題（随想）のなかで、このようなAの素朴な感動を知り、最終課題のテーマを「石けり」とすることを提案した。

その理由として、Aの感動は時間と空間を超える深いもので、Aにしか書けない瑞々しい作品に結実し得ると考えられたこと、そのようなAの感性に筆者自身も心動かされたこと、さらに、インドネシアと日本の石けりの共通性に対する指摘は学術的にも興味深いと思われたこと、があげられる。

ただし、仮説検証型の学術論文として書くのではなく、冒頭に随想をおき、後半にややフォーマルな形式のアカデミック・レポートを載せるという、アカデミック・エッセイのスタイル（一般に日本でいう「随想」の意味でのエッセイとも、海外の大学でいう「小論文」的な意味でのエッセイとも異なる独自のスタイル）で書くこととした。それは、A自身の希望であると同時に、本作品が「随想」の執筆に端を発していることから、自然な選択であった。

以下では、冒頭の随想「プロローグ」「旅の始まり」を中心に、Aの執筆過程と筆者の関与について報告し、留学生の作文教育において、指導者が関心や能力をどのように引き出し得るかについて考察する。

### 3. 執筆と指導の実践

Aの執筆過程と筆者の指導の概要は次のとおりである。

#### 3. 1 事前講義

1月末の指導開始当初、まず、「文章の基本」として次のような点を解説した。

##### (1) 文章の基本

- ① 自分にしか書けないことを書く〈内容〉  
自分を表現することであり、奇をてらうことではない。  
随想でも論文でも同じ。
- ② 誰にも伝わるように書く〈形式〉  
シンプルに書く。(難しく書かない)  
人に伝えることを意識する。  
日本語を正しく使う。(言葉は規則で成り立っているから互いに通じる)
- ③ (余力が出てきたら) 様々な効果を考える〈演出〉  
より適切な表現の検討  
比喩などの効果  
文章展開の工夫(内容を取捨選択する、時系列に沿って書く必要はない)  
効果的なタイトル

そのうえで、以上のことを具体的に示すため、次のような随想の優れた作品例をAといっしょに読んだ。

## (2) 解説のために例示した随想作品

## ① 日本の中学生による随想（未刊、約2200字）

スペインの小学校で過ごした6か月を、美しい空の描写を軸に回想する内容。これを題材に、比喩、オノマトペ、五感に訴える表現、不要な主語がないこと、冗長な説明がないこと、時間経過を大胆に省略して述べていること、タイトルの効果等について、本作品の優れた点を解説した。

## ② 日本の大学生による随想（未刊、約800字）

祖父母と暮らした幼い日の心象風景を、畑に続く道に植えられた花に寄せて綴った随想。ラストは大学生になった現在の描写で終わる。この作品は、筆者が行った大学の文章表現の授業で「こころの玉手箱」という執筆課題で書かれ、教材としての使用許可を得たものである。これを題材に、巧みな描写、方言の会話の効果、ものごとに寄せて書く技巧等について、本作品の優れた点を解説した。

## ③ 演出家、故・蜷川幸雄氏による随想（2012年4月3日『日本経済新聞』朝刊「私の履歴書」欄掲載）

終戦の前後、少年から青年期を過ごした赤羽の街で見た、鋳物工場で働く人たちの命懸けの現場を鮮烈に描写し、現在、演出家として常に念頭にあるのは、懸命に働いた人たちが夢を見ようと足を運ぶところが舞台だ、という信条であると結ぶ。これを題材に、演劇の構成にも通じる文章展開の巧みさ、「現場」特有の表現を用いた効果、色彩描写、比喩、等について、本作品の優れた点を解説した。

以上のような作品例を作文指導の導入期に示した意図は、①文章の基本（上述（1））を具体例で確認する、②指針となる優れた作品に多くふれる

ことにより、よい作品を執筆する契機とする、という2点にあった。これらは、筆者が主に日本人の大学生に対して行ってきた作文教育の経験を参考に、準備したものである。

### 3. 2 導入的課題の執筆

前節の事前講義をふまえて、2月初頭に次のような課題で執筆するようAに勧めた。

(3) 課題：自分についてのエッセイ

「こころの玉手箱」(心の中にある大切な品・人・出来事等について書いてみよう)

- ① 何について書くかを定める(800字以内)。
- ② 文章展開、タイトルの検討。
- ③ 原則として、一文は長くなりすぎないように心がける。不要な接続詞は入れない。
- ④ 削除できる部分は削除し、文章を磨いていく。

本課題は、「こころの玉手箱」(日本経済新聞夕刊の同タイトルの寄稿欄からとった)という枠組みで、大切な品・人・出来事等について800字以内で書く、という執筆課題である。上記②～④は余力があったら検討するよう伝え、最低限①を決めて執筆に取りかかるよう助言した。Aの執筆した最初の原稿は次のとおりであった。

(4) Aの初稿(2017年2月)

(タイトルなし<sup>2)</sup>)

石を投げた後、コロんと音が聞こえた。いつもの聞こえた音。懐かしくて楽しかった。片足でルールを守ってゴールまで飛んだ。また最初の場所に戻って、石を持って繰り返した。毎日ずっと繰り返した。友達のように孤独な日々を付き合ってくれた。

リン。ボールが鳴ってきた。帰りの時間だ。いつもの場所でお父さんの迎いを待ってた。今日は遅かった。待っている間に何かを食べようと、自分が言い出した。向かえたのは熊アイスだった。かき氷のように熊の形でシラップで色を付けた。虹のように美しくて小学生の中に大人気でした。

もう半分くらい食べてしまったが、お父さんがまだ来なかった。どうしようと思っている時、さりげなくアイスが溶けてしまった。

「ああ、お母さんに怒られるなーきっと」汚れた服を拭きながら言った。とその時お父さんの声が聞こえた。「遅いよ」。

家についたとたん、やはりお母さんの目からは逃せなかった。バレた。「また。もういいから早く着替えなさい」とお母さんが言った。「あれ」心の中で疑問を感じた。

着替えた後、いつも自分の世界に入った。その時、二人兄弟で、学校から兄がまだ帰らなかった。お父さんとお母さんはすぐに仕事に戻った。近所の周りにも女の子がいなかった。けど寂しい時間は一瞬忘れてくれた遊びがあった。

考えずに、庭から石を探した。あまり丸くない石でひらったい石がぴったりだ。一つのを見つかって、もう一つのを探した。見つかった後、すぐに地面に上に形を描いた。頭から足の形をまるで人の絵のように描いた。歌いながら楽しくやってた。あっという間に完成した。「よーし」と自分の楽しい時間が始まった。

一つ目の石を最初のブロックに投げた。線から抜かないのならばゲームが続ける。「はあ、いい石だ」独り言でした。片足で石に乗ったブロックを抜き、飛んだ。足から頭まで、戻って、投げた石を持ってゴールだ。ゴールが決めたら二番目のブロックに石を投げたけど、線から抜いた。アウトだ。

次は二つ目の石。二人がやっているように遊びをしていた。ゲームが続いてる。石を投げ、ゴールまで片足で跳んで、ずっと繰り返した。勝ち負けなんか関係ない。ただ楽しくて、一瞬一人でいることは忘れてし

まった。

「楽しかったな」と思っていた時、ドラマが知らない話に進んでいた。遠くの記憶から思い出して、友だちのように石けりでした。日本で石けり遊びあることが初めて知っていた。(997字)

課題の指定字数は「800字以内」としてあったが、約200字超の997字であった。タイトルもどのようにつけていいかわからなかった、とのことであった。この初稿(4)に対し、日本語の表記・文法上の誤りを最低限直し、表現の趣旨について確認するやり取りをしたうえで、次のような助言をした。

#### (5) 初稿(4)に対する助言

出来事をそのまま書くのではなく、自分が心を動かしたポイントに絞って書くとよい。取り上げた「石けり」という題材は興味深いが、それを通して何を表現するのが明確になっていない。もし「石けり」を題材に採るのであれば、なぜ、自分にとって石けりが大切なかを意識化し、それを表現するために必要な内容を取捨選択して書くとよい。その場合、「アイス」をめぐる記述は、不要ではないか。

初稿(4)の最も重要な問題は、何を表現するのが絞られていない(A自身に意識化されていない)ことにあり、その点が指導の最大のポイントと思われたため、(5)の助言をし、もう一度書いてみるよう伝えた。加えて、「幼い日々の包括的な回想」と、「ある特定の日の出来事」とが混在し、自然な形では共存できていないという展開上の問題<sup>3</sup>も指摘した。

### 3. 3 推敲と添削

前節の助言をふまえて書かれた第2稿が、次の(6)である。ここでは、[ ] および取り消し線により、Aの原稿に筆者が行った添削(Aと筆者とが原稿を見ながら事実や心情、表現意図の確認をしたうえで行った)の



結果もあわせて示してある。

(6) Aの第2稿と添削(2017年3月)

「一瞬の思い出」

石を投げた後、[聞こえる] コロンという音が聞こえた。いつもの音。日々欠かせない音 [だった]。石けりを遊んでいる時の音だ。[今も聞こえるような気がする。]

小学校の時、よく一人で石けりを遊んで [して] いた。庭から平たい石を探してから、平地で頭から足まで、まるで人の絵のように [地面にマス] 描いた。あっという間に形が描けた。「よーし」とわくわくしながら石を投げた。プロッター [マス] にあった石を避けて、片足で頭 [一番遠くのマス] まで跳んだ。最初の場所に戻って、ずっと繰り返した。

今考えてみれば、その時、周りに同じ年の女の子がいなかった。代 [わり] によく一人で遊んでいた。だから私にとって石けりは友達のように [な] 存在だった。いつも退屈な時間を付き合ってくれた。

「楽しかったな」と呟いてながら、[ある日、日本の] ドラマが知らないシーンに進んで [を見て] いた。石けりを [して] 遊んでいる場面があっ [姿を見] て、突然 [自分の] 遠い昔のことを思い出した。小学校の頃の石けり。しかし日本に石けり遊びがあることを初めて知った。刺激にびっくりするほど嬉しかった。インドネシアと日本の石けりはどんな違いがあるのかな。(419字)

この第2稿(6)は、助言(5)がいかされ、次のような点にポイントが絞られた。題材の「石けり」を通して、何を表現するかが明確になったといえる。字数も半分以下になった。

(7) 第2稿で絞られたポイント

- ・友達のような存在だった石けり
- ・日本にも石けりがあることを知り、幼い日から時を隔てて得た感動

・インドネシアと日本の石けりの違いへの興味

Aには、ポイントが絞られた点を高く評価し、上記の添削をふまえてさらに推敲するよう伝えた。その結果書かれた第3稿が、次の(8)である。

(8) Aの第3稿(2017年4月)

「蘇えた記憶」

石を投げた後、聞こえるコロンという音。日々に欠かせない音だった。今も聞こえるような気がする。

小学校の時、よく一人で石けりをしていた。庭から平たい石を探して、地面にマスを描いた。あっという間に形が描けた。「よーし」と石を投げた。マスにあった石を避けて、片足で一番遠くのマスまで跳んだ。最初の場所に戻って、ずっと繰り返した。

今考えてみれば、その時、周りに同じ年の女の子がいなかった。代わりによく一人で遊んでいた。だから私にとって石けりは友達のような存在だった。いつも退屈な時間を付き合ってくれた。

留学しているある日、ドラマを見ていた。石けりをして遊んでいる姿を見て、自分の遠い昔のことを思い出した。小学校の頃の石けり。だが、日本にも石けり遊びがあることを初めて知った。嬉しかった。

海に離れても山に離れても距離という言葉があっても同じ遊びをしているなんて、感動した。インドネシアと日本の石けりはどんな違いがあるのかな。(413字)

この第3稿(8)は、タイトルが変更されているほか、特筆すべき点は最終段落に「海に離れても山に離れても距離という言葉があっても同じ遊びをしているなんて、感動した」という一文が追加されたことである。下線部は日本語として正しい表現ではなかったが、Aとの対話を経て「海を隔ても山を隔ても距離があっても、繋がっている」という言葉がインドネシアにあるけれど、インドネシアと日本で(同じ遊びをしている)」と

いう表現に言い換えることとなった。ここには、Aの「感動」が独自の言葉で表現されており、作品に深みを増したと思われる。Aには、文章全体のテーマと相俟って、こうした細部の表現が「文章の基本」(上述(1))の「自分にしか書けないこと」につながっていると伝えた。

また、第4段落に、幼い日から時を経ての現代の感動が述べられているが、的確に文章化するのには難しいようだったので、その点について助言した。

時制に関しても、第2段落を例に、「小学校の時、…した」は過去形だが、続く「庭から…描く」は当時の習慣を目前のこととして述べるなら現在形でもよい、「描けた」は過去形がよい等、のコメントをした。ただ、このような時制の選択は、母語話者でも迷うのであまり気にしないよう伝えた。

Aは「書いていると時々筆が止まって進まなくなる」と悩んでいたもので、この段階では自由に、迷わずに書き進めていくことが重要と判断し、「悩みすぎず、迷った点は母語話者の教師と相談して考えよう」と伝えた。そのほか、細部の表現を修正した。

次の回の指導時に、次の最終稿(9)が完成した。

#### (9) Aの最終稿(2017年4月)

##### 「蘇った記憶」

石を投げた後、聞こえるコロンという音。日々に欠かせない音だった。今も聞こえるような気がする。

小学校の時、よく一人で石けりをした。庭から平たい石を探して、地面にマスを描く。あつという間に形が描けた。「よーし」と石を投げる。石のあるマスを避けながら、片足で一マス一マスを跳ぶ。一番遠くのマスまで行ったら、最初の場所に戻って、ずっと繰り返す。

その頃、周りに同じ年頃の女の子がいなかったから、よく一人で遊んだ。私にとって石けりは友達のような存在だった。いつも退屈な時間を付き合ってくれた。

それから十年ほど経ち、日本のテレビドラマを見ていた時、はっとした。画面には、親子が石けりをして遊んでいる姿があった。日本にも石けりという遊びがあることを初めて知った。嬉しかった。

「海を隔ても山を隔ても距離があっても、繋がっている」という言葉がインドネシアにあるけれど、インドネシアと日本で同じ遊びをしているなんて、感動した。インドネシアと日本の石けりはどんな違いがあるのだろうか。(435字)

最終的に、この最終稿(9)はそのまま最終課題のエッセイ全体の「ブローグ」となり、「蘇った記憶」というタイトルは「蘇った記憶～石けりの旅」としてエッセイ全体のタイトルに移行することとなった。

### 3. 4 もう一つの小品

Aは、最終稿(9)とあわせて、それに続く、次のような随想(10)を書いて来た。この随想は、Aの春休み中の旅を題材にしたものである。

(10) Aのもう一つの随想(初稿)

(タイトルなし)

日本の石けりについてを知るために、本を読むのがもちろんのこと、旅を出た。この旅は今年の春休みにしたことである。T大学で留学している親しい友達に会うために、天理に言った。3年間その友達とシェアハウスをして、いつも「一緒に日本で会おう！日本で遊ぼう！」という口癖をしていたけど、日本で本当に出会えるとはウソみたいだ。

当日、雨が降っていた。空を見上げるとどこまで見ても暗かったけど心が晴れている。背中に乗せている重い鞆に気にせず、バスセンターまで行った。名古屋から天理へ行くとバスで奈良行きに乗らなければならない。昼には天理で止まらないので、奈良で待ち合わせした。初めての奈良だった。

涙もろい私が日本で友達に会えて我慢できなかった。「本当に現実だ

ね」と心の中に確かめていた。その時、雨が雪に変わって、降っていた。とても綺麗だった。二人で写真を撮っている間「なんか外国にいるみたい」と私が言った。友達も同じことを言って、気づいたらここはインドネシアではない、外国だ。ウソのような現実だ。

日本に来てから、知らないうちに一学期が終わってしまい、二人が恋しくなったインドネシアの料理を食べたくなった。その時、食材を買うために、友だちが天理にあるインドネシアの店「Rumah Durian」という店に連れててくれた。そして本当の旅はこの店から始まった。(558字)

Aは、「子どもの頃、どのような石けりをしていたか」をインドネシアや日本の人にインタビューしてみるとよい、との筆者の助言を受け、旅先でインタビューを敢行した。(10)は、その出会いの旅のはじまりを綴った作品である。

前回の指導時は「筆が止まる」と悩んでいたが、(10)の執筆時には、湧き上がる思いを文章として表すことに喜びを感じられるようになってきていた。また、前回の時制に関する筆者のコメントを受け、文末等をよく吟味した様子がうかがわれた。A曰く、最後の一文「本当の旅はこの店から始まった」の文末を「始まる」とするか「始まった」とするか悩んだという。このような点を吟味する姿勢が出てきたことに、書き手としての進化がみられ、Aにもそのことを伝えた。

初稿(10)に筆者が添削を施し、タイトルを「旅のはじまり」と付して、次のような小品が完成した。これを、(9)のプロローグの後に置くこととした。

(11) Aのもう一つの随想(最終稿)

「旅の始まり」

日本の石けりについて知るために、旅に出た。この春のことである。T大学に留学している親しい友達を訪ねた。彼女とはインドネシアで三年間シェアハウスをしていた。「日本で一緒に遊ぼう!」といつも言い

合っていた。

出発の朝、名古屋は雨が降っていた。空を見上げるとどこまでも暗かったけれど心は晴れていた。背中に乗せた重い鞆を気にせず、バスセンターまで行った。名古屋から天理へ行くにはバスで奈良行きに乗らなければならない。昼のバスは天理で止まらないので、奈良で待ち合わせた。初めての奈良だった。

バスターミナルに着いたが、待っても待っても、友達は見れなかった。30分ほど遅れてきた友達の顔を見て、涙がこぼれた。涙もろい私は日本で友達と再会できて我慢できなかった。「本当に現実だろうか」と心の中で確かめていた。その時、雨が雪に変わった。とても綺麗だった。二人で写真を撮りながら「外国にいるみたい」と私が言った。友達も同じことを言った。しかしここはインドネシアではない、外国だ。ウソのような現実だった。

日本に来てから、知らないうちに一学期が終わってしまい、二人ともインドネシアの料理を一度も食べていなかった。お互いの顔を見たら急にインドネシアの料理が恋しくなった。シェアハウスをしていた時、温かいインドネシア料理をよく一緒に食べた思い出が蘇ってきたのだ。食材を買うために、天理にある「Rumah Durian」というインドネシアの店に友達が連れていってくれた。そして本当の旅がこの店から始まった。(635字)

この2つ目の随想の後にさらに「出会い」というタイトルの作品が続き、前半の随想のパートが終わる。

### 3. 5 後半「アカデミック・レポート」の執筆と調査

続く後半のパートでは、インドネシアと日本の石けりの図形や遊び方の異同を考察し、さらに世界各地の石けりとも比較し、各地に類似の形式が広がっていることを、アカデミック・レポートの形式で示す。

後半をこのテーマで執筆することとなったのは、3.3節、第2稿(6)

の末尾に示された「インドネシアと日本の石けりはどんな違いがあるのか」という疑問が発端であった。この問いが興味深かったため、先述（前節）のように、筆者からAに「子どもの頃、どのような石けりをしていたか」をインドネシアや日本の人にインタビューしてみるとよい、と助言をした。

これを受け、Aは春休みを利用して旅先やインターネットでのインタビューにより、各地の石けりのデータを精力的に集めた。

さらにAは、本テーマに非常に有効な、次の文献を見出した。

(12) Aの見出した参考文献

加古里子（2001）「石けり遊び」『子どもと遊び』大月書店，pp.55-61.

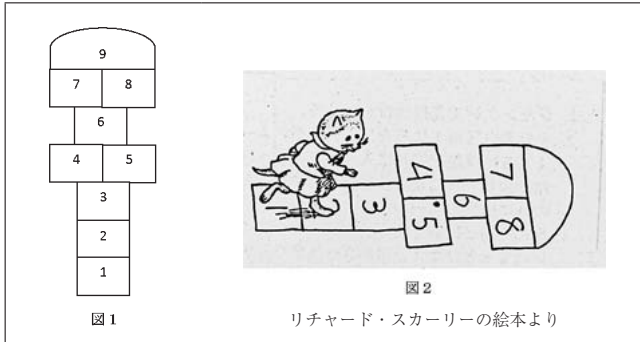
加古里子（2007）『伝承遊び考・石けり遊び』小峰書店.

馬場富子（1974）「石遊び」『今昔子供遊び—相馬地方を中心として』錦正社，pp.175-179.

これらを用いて、主に日本における石けり遊びのルール・使用図形やそのバリエーションを知ることができ、インドネシアのデータとの比較に有効であった。

加えてAは、上記の加古（2007）に引用された、アメリカの絵本作家、リチャード・スカーリーの絵本に載っているけりの図形が、次のように、Aの調査地の一つインドネシアのベタウィ地域に見られる石けりの図形と、まったく同じであることを発見した。

- (13) Aのレポートに示された、インドネシアのベタウィ地域の図形(図1)と、アメリカの絵本の図形(図2)の比較



こうした発見に至る過程として、Aは上記の文献を近隣の大学図書館から借りて短期間で読み、内容を非常によく理解していた(Aは独力で読み、筆者の補助はない)。筆者が内容について尋ねると、細かい図形に関する記述内容を的確に再現した。<sup>4</sup>

さらにAは、非常に興味深い調査結果として、同じクラスの留学生たちにインタビューし、次のように、カンボジア、シンガポール、クロアチア等でもこれと同一または類似の図形が用いられていることを明らかにした。

- (14) Aのレポートに示された、カンボジア、シンガポール、クロアチアの図形((13)の図形と同一または非常に類似)

4.2. カンボジア

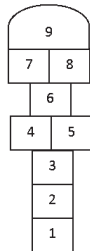


図28

4.4. シンガポール

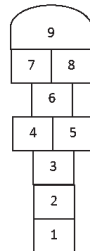


図30

4.5. クロアチア

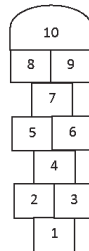


図31



そして、後半のレポートの最後を、次のような「まとめ」で締めくくった。この結論は、民族学的にも興味深い内容を含んでいると思われる。

(15) Aのレポートの「まとめ」

以上、世界各地の石けりについて述べた。石けりという遊びはインドネシアと日本だけではなく、世界各地に広がっていることがわかった。

インドネシアの石けりの基本的な遊び方は「投げる」型の一種類だけだが、日本の石けりは「投げる」型と「蹴る」型の二種類がある。両国とも地域によって使われる図形には多くのバリエーションが存在する。韓国やクロアチア等、他の国にも目を転じると図形のバリエーションはさらに豊かになる。

一方、カンボジアやシンガポールには、インドネシア(ベタウィ地域、メラユ地域、バタックマンダイリン地域)と同じ図形を使うケースも見られる。つまり、カンボジアやシンガポールの図形とインドネシアのいくつかの地域の図形は同一起源の可能性がある。

また、韓国の石けりは、インドネシアと異なる図形を使うが、特別ルール(自分の「家」のルール)が存在する点にインドネシアのスダ地域との共通性がみられる。

結論として、各国各地域の石けりは遊び方や図形にバリエーションが見られるが、いずれも同じ子ども遊びであることに変わりはない。海を隔てても山を隔てても、子どもたちが同じ遊びをしていることは感動的だ。ある国から他の国にどうやって伝わったのか明確には分からないが、起源が同じとみられる子ども遊びが各国に存在していることは興味深い。

以上の過程を経て、当初は純粋な随想となる予定であったAの作品は、前半に随想3点を置き、後半にアカデミック・レポートを置く、アカデミック・エッセイのスタイルとして完成した(全文は『日本語・日本文化研修コース研究レポート集(2016-2017年度)』(名古屋大学国際言語センター)

に掲載)。

#### 4. 日本人学生への作文教育との比較

以上の実践をふまえて、留学生に対する作文教育と日本人学生に対する作文教育との異同を考えたい。

筆者はこれまで、主に日本人の大学生に向けて文章表現の授業を担当し、導入として3.1節に示した内容の講義をしたことがあるが、(1)の「自分にしか書けないことを誰にも伝わるように書く」という「文章の基本」は、母語で書くか否かを問わず、共通に指導すべきだと考える。

一方、母語以外での執筆が、母語での執筆と大きく異なるのは、〈書きたい内容〉と〈書ける内容〉が乖離している場合が多いということであろう。通常、母語以外で文章を書く場合、限られた語彙や文法で間に合わせなければならず、母語と同レベルには書けない。一方で、〈書きたい内容〉の方は、豊かで高度な内容である場合も多い。たとえば、次の例をみてみよう。

(16) (修正前) その上に、そのコンセプトを伝えるイメージと比喩を調査したいと思う。この考えについて説明する。まず、「光」のコンセプトに関して、その比喩は僕と記憶の関係を対象すると思う。

(17) (修正後) 以下では、そのコンセプトを伝えるイメージと比喩について考察したいと思う。まず、「光」のコンセプトに関して述べると、その比喩は「僕」と記憶の関係を象徴していると思う。

(16) は、実際に学生が書いたレポートの一部であるが、文法・表現の両面に問題があり、〈書きたい内容〉を表現し得ていない。これについて、指導者との対話、助言を経て修正したものが(17)である。修正の結果、豊かな内容を論じようとしていたことがわかった。

このようなケースにおいて、学生の〈書きたい内容〉の方を、評価し尊

重することが重要であると考え。一般に、〈書ける内容〉だけを書こうとすると内容が乏しくなりがちであるが、〈書きたい内容〉のレベルを下げずに果敢に挑戦する意欲を尊重したい。それは、Aへの指導例からもいえるように、以後の執筆意欲につながると思われる。

また同時に、〈書ける内容〉のレベルを高めるための教育も必要であろう。〈書ける内容〉のレベルが低いまま執筆を続け、それを教師が添削することを繰り返しても、飛躍的な進歩は期待できないと思われる。多様な文章の読解を通して新たな表現を獲得したり、文法の基礎力を養うなど、インプットにあたる教育が重要である。

## 5. 結論

以上、作文教育の実践例を通して、留学生の作文教育において、指導者に関心や能力をどのように引き出し得るか、について考察した。

事例報告のとおり、Aの作品は、当初は純粋な随想となる予定であったが、最終的に、前半に随想3点を置き、後半にアカデミック・レポートを置く、アカデミック・エッセイのスタイルに発展した。

この実践例が示すのは、学生は〈書きたい内容〉にたどり着けば、自らの能力を活性化させ、主体的に執筆を進めるということである。よって指導者は、学生の〈書きたい内容〉を引き出し発展させられるよう、原稿や対話を通して学生の関心を汲み取る姿勢をもつことが重要だと思われる。

初山・秋山(1992:129)は、留学生に対するレポート・論文指導における指導者の姿勢について「指導を行える専門分野の確立を目指して日々研鑽を積んでいかなければならない」と述べたうえで、日本語上級レベルの留学生への指導の一つの方向として、言語学者・柴田武による次の言説を引用する。

(18) 日本語教師に期待したいことの一つは、何か一つでいい、日本の伝統文化について専門家であってほしい。柔道でも、茶道でも、華道でも、日本舞踊でも、国語学でも、民俗学でも、何でもいい。日本

語教師が日本語教育だけしかできない場合は、ことに外国では、息のつまる思いをすするだろうと思う。日本の伝統文化を通じて生徒との交流が深まり、その交流が日本語で行なわれるのである。(柴田1987:108)

アカデミック教育において、学生の関心を汲み取り発展させるには、指導者が幅広い視野と柔軟な姿勢をもつと同時に、自身の専門性を高め、それを基盤として教育を行うことが必要であると思われる。

### [謝辞]

本稿の作文教育の場となった、名古屋大学日本語・日本文化研修留学生のクラスの先生方には、着任したばかりの筆者に種々温かくご教示いただき、深く感謝申し上げます。コースマスターである羽山洋介先生には、クラスの運営を通して教育者としての姿勢を教えていただき、自由な教育の場を調べていただきました。拙いながらも本稿を執筆し得たのは、研究教育全面にわたり常に温かく励ましてくださった羽山先生のお陰です。ご栄転に伴い本年3月をもってコースマスターの任を降りられることを寂しく思います。

Aさんには、その感性と知性により素晴らしい作品を執筆し、瑞々しい感動を与えていただいたことに心から感謝致します。ご活躍をお祈りしています。

### 注

- 1 母国では大学の学部3年生で日本語学科に所属。大学入学と同時に日本語学習を本格的に開始した。それ以前から兄弟の影響で日本語学習の経験があり、日常的に日本のドラマ等に親しんでいたという。普段の学習では、ノートなどはあまりとらず、主に聴覚で日本語を覚えた。母語も含めて、文章を書いた経験は少なく、書くことにはあまり関心をもってこなかった。
- 2 Aは、どのようなタイトルをつけていいかわからない、とのことであった。

- 3 そのような文章展開となったのは、事前講義（前節）で、必ずしも〈時系列に沿って書く必要はない〉と指導したことが影響しているかもしれない。
- 4 舩山洋介・秋山豊（1992:127）は、留学生が研究に必要な文献を読む際の読解力について、自身の研究と密接に関係のあるものであれば「やや難しいものであっても、強い知的好奇心に支えられて、読み進めていくことが期待できる」としており、本稿のAのケースはその好例といえる。

### 参考文献

- 柴田武（1987）『柴田武にほんごエッセイ1ことばの背後』大修館書店。
- 舩山洋介・秋山豊（1992）「留学生に対するレポート・論文指導の実際と問題点」『言語文化論集』第13巻2号，pp.123-134，名古屋大学言語文化部。

（ながさわ いつき・准教授）

